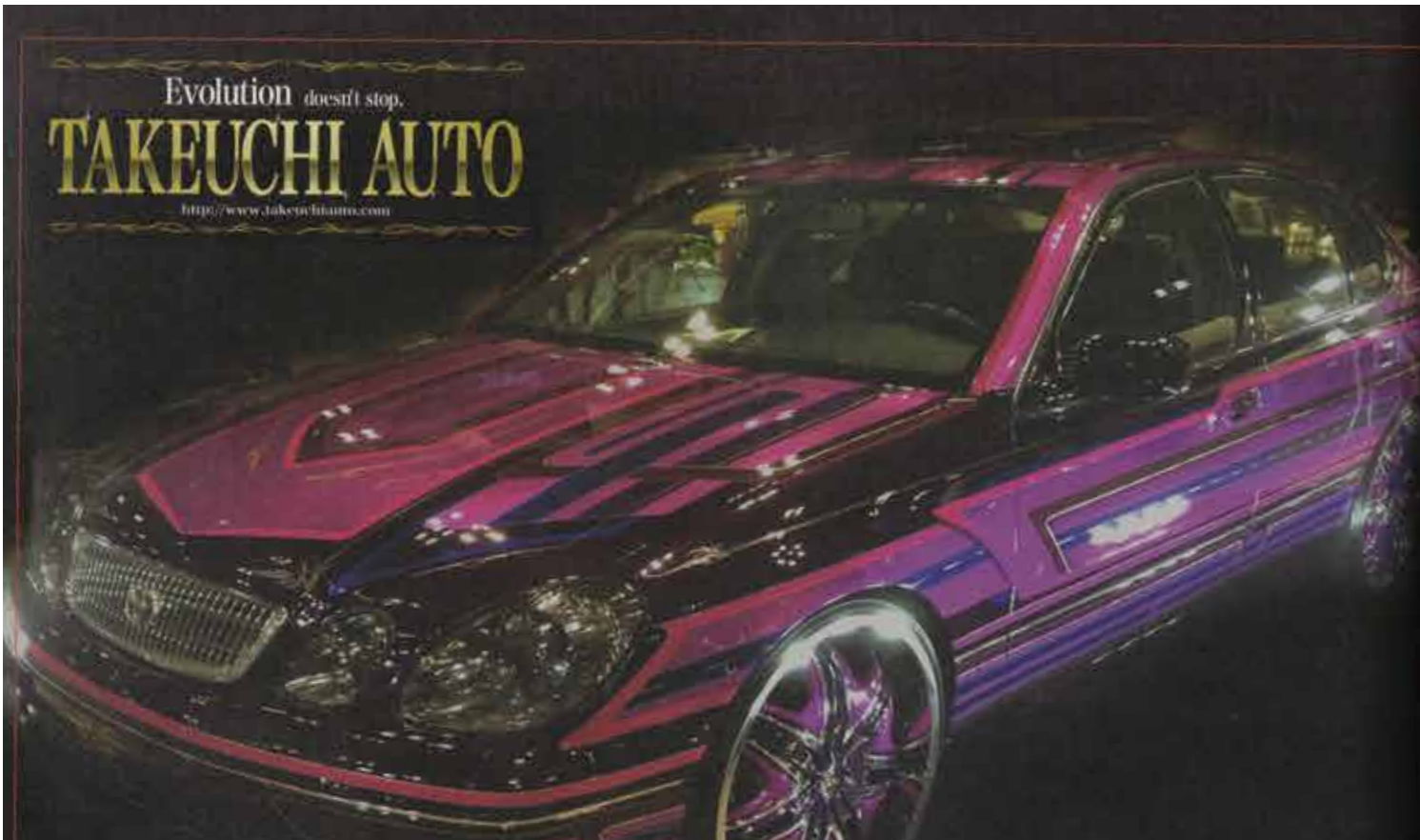


Evolution doesn't stop.
TAKEUCHI AUTO
<http://www.takeuchiauto.com>



パテを使わない钣金
カスタムペイント - 違いは钣金で -



〒250-0021
神奈川県小田原市早川 3-12-6
TEL/FAX 0465-22-4621
<http://takeuchiauto.com>

Painter in Finite

NS MAGAZINE

2015 NOVEMBER

The 7th Stage
**NEWSTYLE
CUSTOM
AUTO SHOW
2015**

LATEST NEWSTYLE FROM LAX
ON THE STREET
NEWSTYLE GRAPHIX

EVENT REPORT 2015 Autumn
CROSS FIVE
RIDE FESTA



**BUILDER'S
ANTHOLOGY**

JET CITY, TAKEUCHI AUTO



EVOLUTIONARY NEWSTYLE

竹内伸成 from
TAKEUCHI AUTO
YOSUNARI TAKEUCHI

カスタムペイント界の若きエースTAKEUCHI

小学校3年生になる頃には、自分でショップを開業することを決めていた。

今までに獲得したトロフィーが鬱然と並べられ、ちょっとしたホテルのカウンターを思わせるエントラント。整理整頓されたTAKEUCHI AUTOのショールームのソファで向かい合い、軽い挨拶の後に出てきた言葉だ。端正な顔立ちで物静かな竹内氏からは、全く想定していなかったひと言だった。これまでに会った人の中で、10歳にも満たない年齢で自分の将来に設計図を描いていた人なんかに出会ったことがない。思わず行き当たりバッタリの自分の9歳の頃を思い浮かべてみた。当然だがとても比べられるような9歳ではない。というか、記憶そのものすらほとんどないという自分がオカシイのか、いや、そんな言葉を本人から聞いても、しばらくはそのことを信じることに出来なかったが、その意思の強さと明確な目標設定は、現在までの経

過を聞けば聞くほど納得させられてしまったのだ。

アメリカのシーンを強く意識したカスタムペインターの中では若手でもある竹内氏と話しをしていくと、ペインターというよりも、その生き方そのものに非常に興味を惹かれてしまう自分がいた。'81年生まれの34歳。父親は钣金塗装会社を経営しており、スプレーが身近にある環境で育つ。この環境で竹内氏が興味を抱いたのは、意外にもスプレーではなくハンマーだったようだ。いわゆる钣金に興味を持った少年は、あの独特の形状をした钣金用ハンマーをおもちゃ代わりにして育つ。そんな少年時代は、恐らくたまたま身近にあったもので遊んでいただけだと思うが、9歳の頃に自分で钣金塗装のショップを営することを決めてからは、その次の思考回路もまさに驚きだった。

普通ならハンマーの技術の鍛錬にだけ目を向けようとするところだが、この時点で、自分で钣金塗装

会社を営むからには、最初に営業のスキルを身につけなければやっていけないと思い、早くも小学生の段階で将来の就職先を物色。中学生の頃には、日産が経営不振に陥っていることに目をつけ、あえてその苦境に身を置くことによって、そこで自分のスキルを磨くことができると考えていたようだ。聞き手である自分の人生をなんだか恥ずかしく感じてしまうような思考回路だが、ふと向かいのファクトリー前に停まっている美しいグラフィックペイントが施されたクルマに目をやり、その時突然理解した。

見ても聞いてもなかなか理解出来ないグラフィックの複雑な工程と色の選択。グレー色のサフェーサーの状態から、ずっと先にある完成形イメージを明確に頭の中に描ける目標設定とそれまでの工程計画。それは、まさに先を読んだ人生設計と同じだったのだ。

パテを使わない钣金には絶対の自信がある

当初設定した日産への入社を果たすため、高校自体を日産に入社するために有利な学校を選択。卒業後は希望通りの職につき、販売店で新車の販売を担当。その年にはメーカーの新人賞を受賞するなど、目覚ましい活躍をするものの、「ニューモデルの発表と重なっていたから運がよかったな」なんて影で言われると、その翌年には2倍の目標を自身に課して、それも見事にクリア。目標を達成して退社し、小さい頃に遊び場でもあった父親が経営していた钣金塗装会社を手伝うことになる。ここでも技術的なことはもちろんだが、会社員時代に身につけた営業のスキルを発揮するために、アルバイトを掛け持ち、深夜に帰宅してから钣金の技術を磨くなど、1日数時間の睡眠時間という生活を続けていた。そして僅か3年ほどでそれまでの顧客の数を5倍にまで増やす。

当時は钣金塗装にしか目がなかったが、この頃にカスタムペイントにも興味を持ち出したという。ここでも自分の欲求にストレートに従い、収入のほとんどをH.O.K.などのカスタムペイント用塗料の購入に充て、最初は友人のクルマにペイントさせてもらうことから試行錯誤を繰り返した。当然最初からすんなりと満足出来る結果が得られる訳ではなく、数多くの失敗をこの時に経験したという。そんな傍にいたのが、SOLID C.C.のメンバーだった。この出会いが現在の飛躍にも大きく影響しているだろう。最初にKandyペイントを施したのは、国内のピンストライプ第一人者でもあるワイルドマン石井氏によるピンストライプがドロウされたクルマだった。

「元々の研究熱心な性格もあり、ペイントするだけじゃ飽き足らずに塗料自体の研究にも没頭して、自分で材料を配合して塗料を作り出したりもしましたね(笑)」もう何を聞いても驚かない。

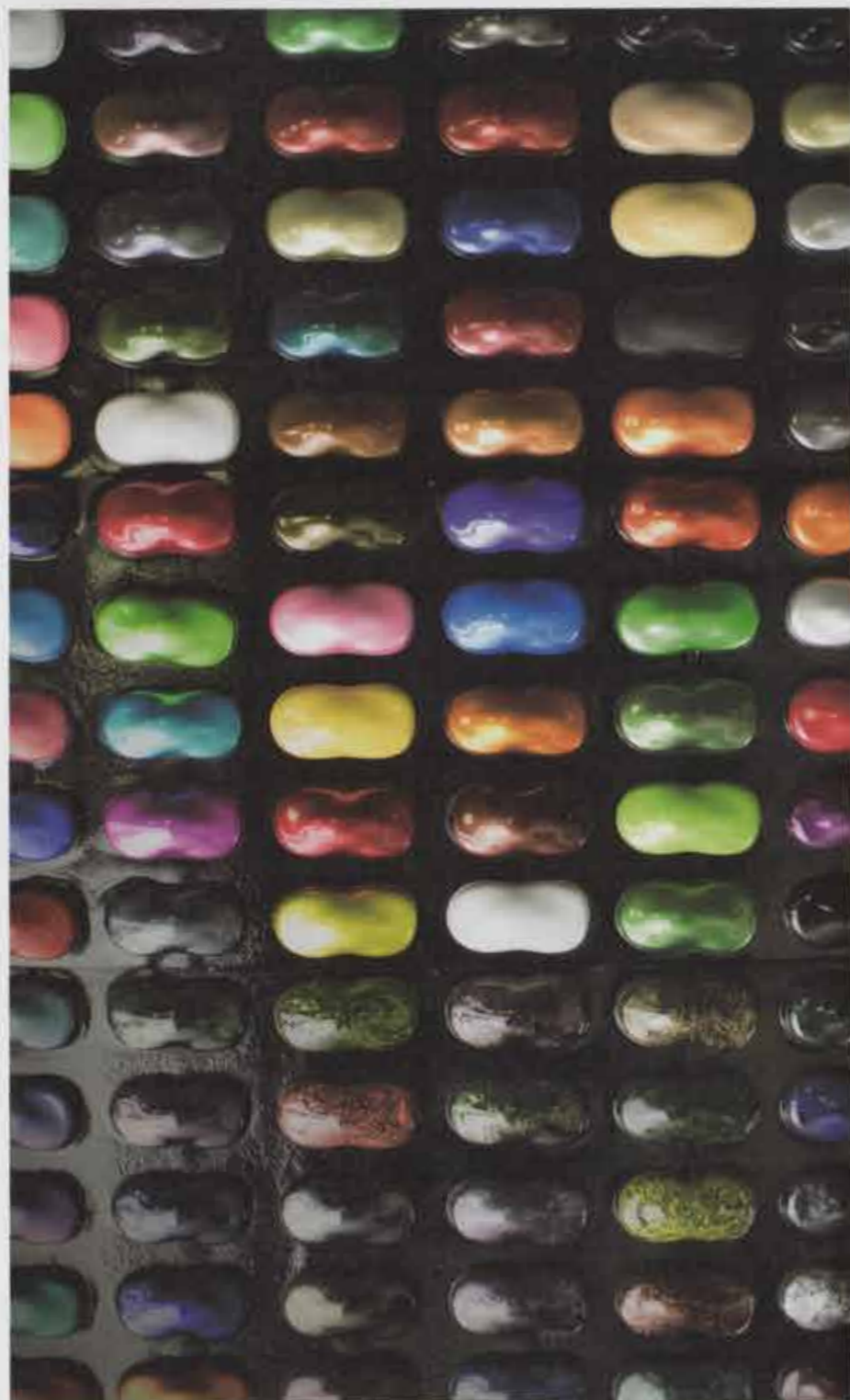
そして'09年、竹内氏が27歳になる頃に、9歳の時に思い描いた夢を実現させる。屋号はTAKEUCHI AUTO。一般の钣金塗装と並行して、自然に増えていったカスタムペイントの仕事も精力的にこなしていった。例えば得意な工程は?との問いには、「钣金ですね。やっぱり钣金ですよ。钣金が出来なければペイントまでの工程に行き着かない。得にパテを使わないで徹底的にハンマリングだけでストレートを出すことには自身がありますよ」。



ショップには同時進行でプロジェクト的な大作業のクルマも入庫している。このローライダーの'75年のCapriceは、ボディ全面にグラフィックを投入する予定とのこと。グラフィックも魅力だが、古いクルマの仕上がりを大きく左右する钣金が最も大切な要素でもある。ペイントばかりに目が行きがちではあるが、竹内氏が最も得意とする钣金にも注目したい。



事務所兼ショールームにディスプレイされているトロフィーの数は膨大。現在までに数多くのクルマをペイントしてきた実績と、カスタムペイントで各ジャンルのアワードを獲得してきた証が、整然と並べられている。特に近年、竹内氏が力を注いでいるのが、アメリカンカスタムの分野であり、まさにNS Magazineのクルマのペイントの仕事も多くなってきているようだ。



今後はさらにアメリカのシーンに目を向けたい

「パテを使わない钣金というのは、こだわりももちろんですけど、工期の短縮という意味も大きいです。パテの乾燥期間はやはり必要になりますからね。特にカスタムペイントをするのであれば尚更ですね」。

現在はJCPA (Japan Custom Paint Association) にも所属し、全国のペインター同士の交流でさらなる技術の向上を図っている。カスタムペイントに関しては、「とにかく緻密にデザインする事にも自信がありますね。キッチリと左右を揃えたライン、そしてスティーブ・ディマン氏から教わったジュエリーライン(ベースのフレイクを極細のマスクングテープによって露出させる手法)も徹底的に研究しました」。ベースとなるフレイクは最大三層に分けて吹き、フレイクを寝かせた層と立たせた層を交互に作ることで、より光の反射を拡散させてフレイクの輝きを鮮やかにするなど、非常に手間のかかる作業も得意分野だ。

そして、試行錯誤で覚えたリーフィングも、自らリーフを貼る糊の素材の研究をして、刷毛目が出ない配合。その他少々

マニアックな話だが、ボディの先端から後ろまでの長いラインのスピニングも一回で行えるように、糊の乾燥具合を調整した独自のブレンドで実現。もちろんそれらのクオリティも申し分のないものだ。それは98ページのアーティストのペイントを見れば一目瞭然でもある。

そんな竹内氏だが、自分に足りないものは?との問いには、「もちろん技術面では今でも発見があるので常に勉強ですが、もっとアメリカの生のクルマをこの目で見て、それをデザインに反映させることですね。ネットで画像を見るのと、実際に見て感じることは大違い。そんなことをよくHAMMAR DESIGNの濱岡くんとも話をしますね。彼はアメリカでも仕事をしているくらいですから、その点僕はまだまだです」。

はっきりと先を見据えて今を生きている竹内氏。恐らく明確なこの先のプランもあるのだろう。

「10年後はカスタムだけに没頭していきたいです」
このようなペインターが一人でもいる限り、我々ユーザーとしてのクルマ遊びの未来は、きっと明るいはずだ。

PROFILE 竹内伸成

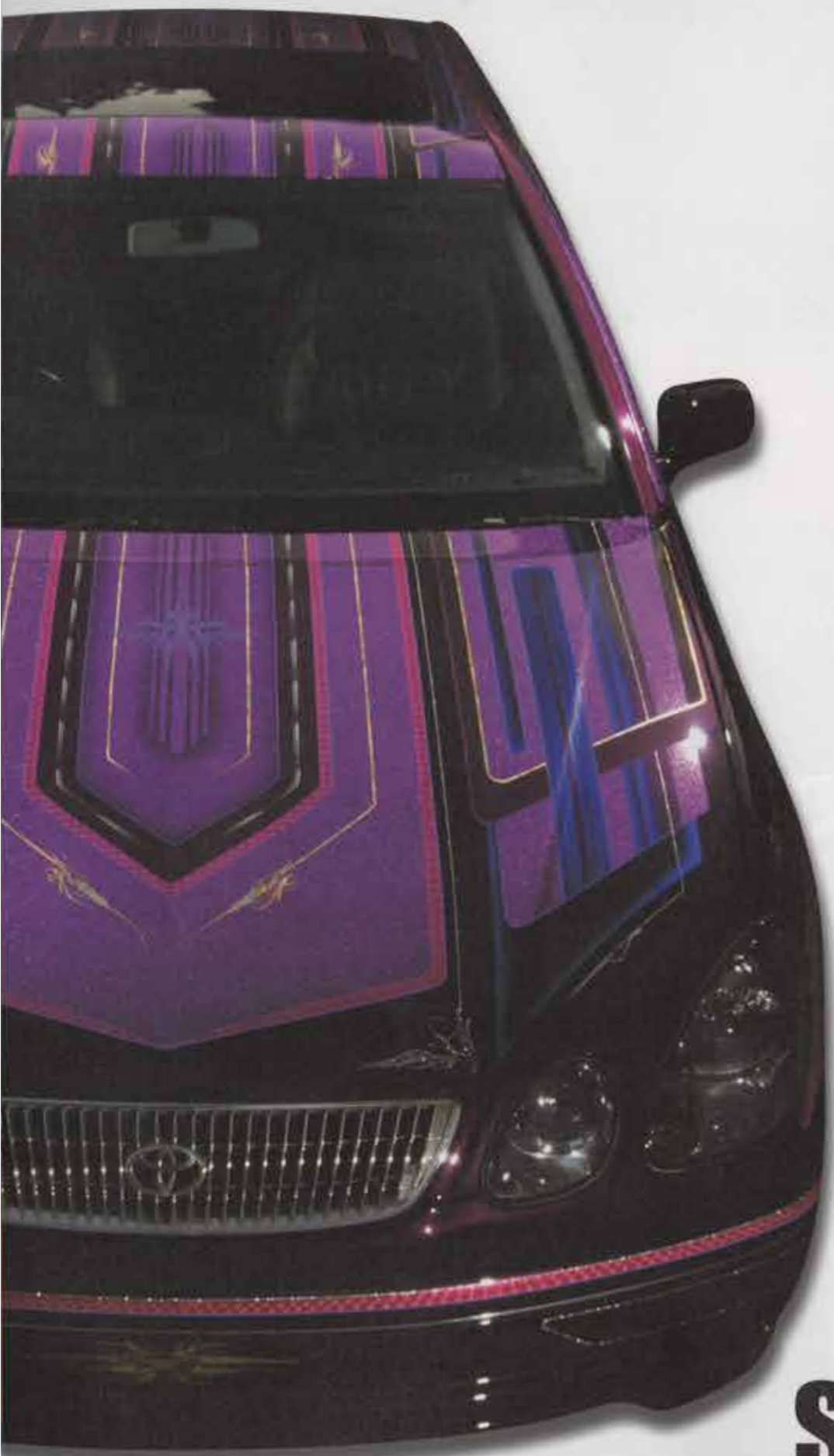
- ▶ OCCUPATION(職業) TAKEUCHI AUTO 代表取締役
- ▶ BIRTH(生年月日) 1981年6月28日 神奈川県
- ▶ VEHICLE(現在の愛車) 2010 FORD F150
- ▶ CHARGE(主な担当) カスタムペイント、同時に钣金は得意中の得意

TAKEUCHI AUTO / タケウチ・オート



神奈川県の中でも都心部からは若干離れたエリアでも小田原市の住宅街の一角にショップを構えるタケウチ・オート。精密なカスタムペイントを施す竹内氏の性格を表すように、ショップ及びファクトリー内は非常にクリーンな印象。スタッフは事務を担当する奥方と(右)、ペイントから修理までクルマ全般の作業をサポートする女性スタッフ(左)。もちろんペイント関連以外にも、修理をはじめとした作業も多くこなしているが、彼女のサポート力はかなりのもの。上の竹内氏がラインテープを貼っているのは、実は彼女の愛車でもある。

TAKEUCHI AUTO
〒250-0021 神奈川県小田原市早川3-12-6 www.takeuchi-auto.com
【TEL】0465-22-4621 【営業時間】10:00~20:00(訪問の際は要予約)
【定休日】日曜日 修理・钣金塗装他



グラフィックペイントの妙は、色とパターンを組み合わせて構成されるが、我々見る側はその美しさばかりに目がいきってしまう。実は、この「組み合わせ」以外にも、多くの計算と経験によって導き出された緻密な作業があることによって美しいペイントが仕上がっていることは、ペイントを見ただけではなかなか伺い知れない部分である。そして、それはまさに複雑怪奇といっても良いくらいの途方もない手間が隠されており、まさにこのアーティストは、ペインターの驚くべき隠された計算を随所に投入して仕上げたものなのだ。ジャンルに関係なく、昨今のカスタムペイントは華やかな技術が様々な存在しているが、それだけに因り得ないアプローチには、数多くの工夫などが存在している。

このアーティストのペイントは、神奈川県のお店 TAKEUCHI AUTOの竹内氏が担当。ペイントに対してアティチュードは並々ならぬものがあり、グラフィックの緻密さとその完成度の高さは、目を見張るものがある。特にスティーブ・ディマンが来日した時には、彼から多くの技術を学び、その後もさらに腕を磨き続けているようだ。

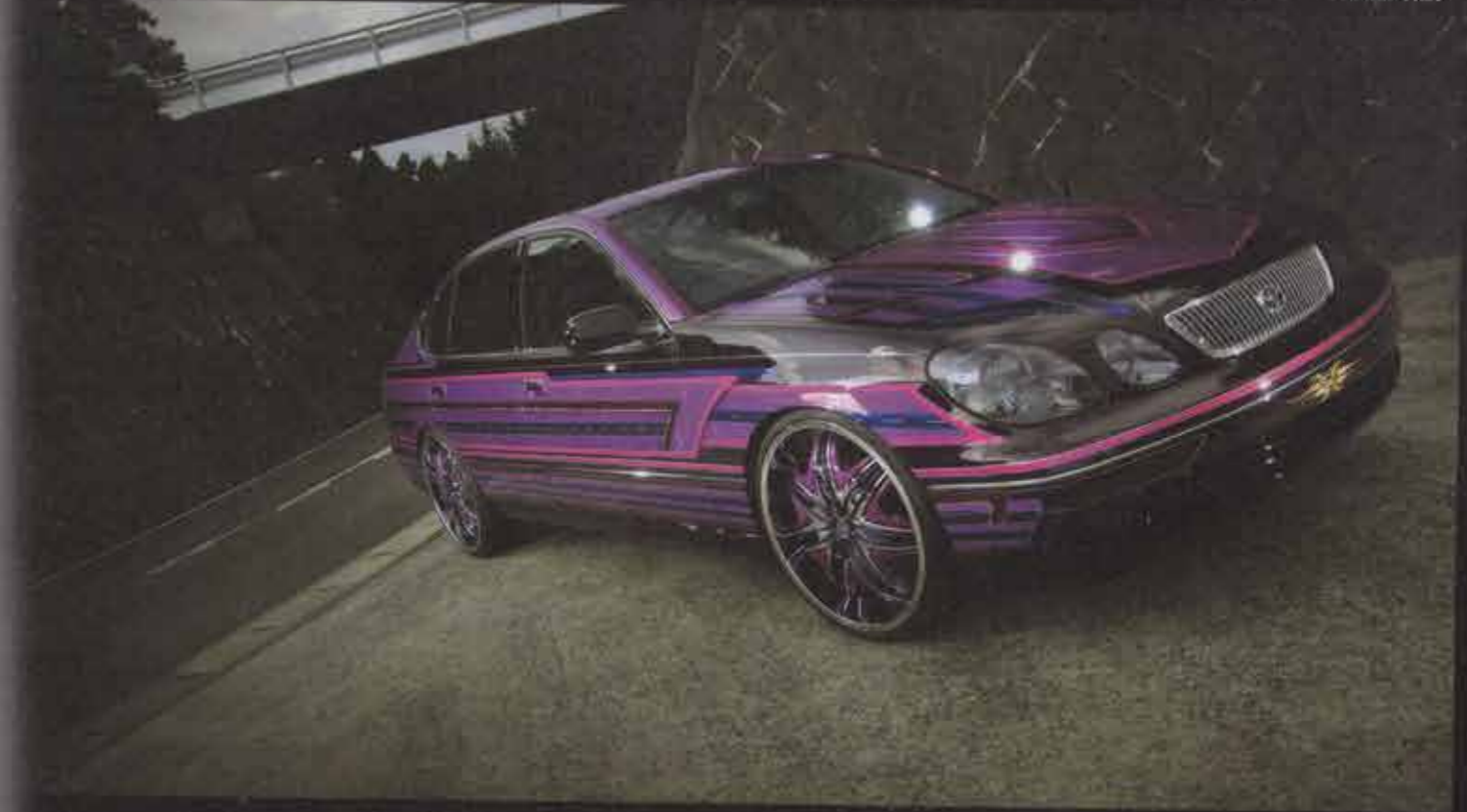
ベースはレッド、ブルー、ピンクパールをブレンドしたオリジナルの調合で、青みのあるボルドーのよう印象。そしてキャンディ下のフレークは、ウェット→ドライ→ウェットと三段階に分けて重ねている。これには、フレークの粒を寝かせる層と立たせる層を重ねることによって、全方位に光が拡散するために取られた処置だ。この効果が最大限発揮されているのが、0.75mmという糸のような細さのラインテープを使った通称ジュエリーラインだ。そして、左右のリアクォーターからドア、ピラー、ルーフ、トランクを一本のラインで繋げるといったデザインのギミックも表現。NEXTでその美しさを披露し、見事にアワードも獲得している。



クロームのホイールはディアプロのモーフィアス22インチ。ボディのグラフィックのパターンに合わせて二つのカラーをペイントしており、全体の統一感を演出する。

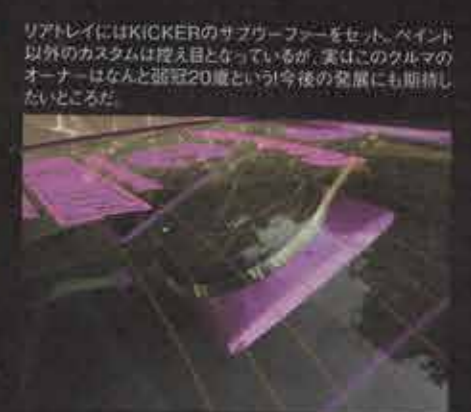
SPRAYED by TAKEUCHI AUTO

複雑と精密が織りなす至極のカスタムペイント



Text & photographs by MASAHITO HAYASHI / special thanks to TAKEUCHI AUTO / www.likeachick.com 0465-22-4621
Illustration: MASAYUKI AOKI / © KANAGAWA

1998 TOYOTA ARISTO



リアトレイにはKICKERのサブウーファーをセット。ペイント以外のカスタムは控え目となっているが、実はこのクルマのオーナーはなんと2000年という今後の発展にも期待したいところだ。

主に直線で構成される全体のグラフィック。様々な技を投入することよりも、そのデザイン性と竹内氏らしいキメの細かい作業のオンパレード。ヘッドライト上のボンネットのプレスライン上のフェードとジュエリーラインは、全体のグラフィックのデザインを邪魔しないために採用。



ルーフのスピニングも非常にクオリティが高い。これはルーフを貼るための糊を徹底的に研究した結果だという。様々なアレンジを加えたことによって、リリケータードリブ(極細ゴールドリブ)など、細の刷毛目は一切出ないように。研究に研究を重ねたという。まさにペインターでなければ知り得ない苦労だ。ジュエリーラインは0.75mmと1.6mmを使い分けている。この跡は、フレークの塗装の仕方によっても影響を受ける部分だ。